

研究報告

病院実習において看護学生が「生活者」として患者を捉えた内容

Nursing Students' Perception of Patients as "Ordinary Persons" During Nursing Practice in Hospital

菊池真弓¹⁾ 若澤弥生²⁾

Mayumi Kikuchi Yayoi Wakazawa

キーワード：病院実習、看護学生、生活者

Key words : nursing practice in hospital, nursing students, ordinary person

要旨

本研究の目的は看護学生が病院実習において、疾病による障害やそれに伴う症状がありながらも個の歴史の中で培われた生活スタイルや価値観を持ち社会的な役割や経済的な側面を持つ「生活者」として、受け持った患者をどのように捉えたのかを明らかにすることである。成人期・老年期の対象者に対し看護過程を展開する病院での実習を履修し、かつ在宅看護学実習履修前にある研究協力の同意の得られた看護系大学生を研究対象者としてインタビュー調査を行った。得られたデータを質的記述的に分析した結果、看護学生は患者を「生活者」として【生活習慣の嗜好と困難】【複雑な感情】【切なる願い】【家族との関係性】【人生経験から培われた個性】【担ってきた社会的な役割】を持つ人として捉えていた。教員は看護学生が漠然と捉えている患者の情報を引き出しその人との関わりから知り得た【複雑な感情】【切なる願い】を言語化させていく事が「生活者」としての理解を促すと示唆された。

I. はじめに

1. 研究の背景

近年生活習慣病をはじめとする慢性疾患患者の増加(厚生労働省、2017)により、患者の生活をどのように支えるかという課題に対し、そこで生じている多様なニーズに対応する必要性から医療中心ではない新たな視点として対象を「生活者」として捉えるという概念が注目されている。

「生活」とは人間の存在そのものであり、各個人の主体的な営みである。その「生活」は、その人の価値観、習慣、考え方、暮らし方、生き方などによって形成される(日本看護科学学会看護学術用語検討委員会、2011)。看護において「患者」

と表現する時画一的な印象がつきまとうが、「生活者」と表現する時には1人の存在として自分の思想を経験の中から見いだしていく存在であり(黒江・藤澤・三宅・普照・田内、2006)、その人の生きてきた個の歴史の中で培われた生活習慣や生活信条を持ちながら生きている人としている(下村・河口・林・土方・大池、2003)。看護職者は対象者との相互作用の中でその人の生活そのものの事実と、その人にとっての生活の意味を健康との関連から捉える必要がある。そして看護師は目の前にいる患者の症状や疾患だけでなく、患者にとって生活がどのような意味を持ち、患者がどれだけそれを大切にしているかを知ることが重要であり、

1) 了徳寺大学 健康科学部看護学科 Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

2) 元国際医療福祉大学 保健医療学部看護学科 Department of Nursing, School of Health Sciences, International University of Health and Welfare

看護の対象となる人々の生きてきた過程の中で培われた生活を捉え健康を支援する能力が必要であると考える。

看護師を養成する看護基礎教育のカリキュラムにおいて、対象者の健康課題に対応する実践能力を養うために臨地実習は重要な位置づけにある。高齢化や慢性疾患の増加に伴い、1996年の看護基礎教育のカリキュラム改正によって、入院治療を行う病院から人々が社会生活を営みつつ療養生活を送る地域や在宅などへと臨地実習を行う場所が多様化した。臨地実習が講義や演習と異なる点は、既習の知識や看護技術を実際の個別の対象者に対し適応させ科学的根拠に基づいて実践していく学習であるという点である。臨地実習において看護学生は患者や家族、医療関係者とかかわり、人間関係を深めながら看護の理論と実践を統合して理解することが求められている(厚生労働省、2011)。

2. 先行文献の検討

臨地実習における看護学生の生活者の理解を明らかにするために2017年12月に医学中央雑誌Web版(Ver.5)データベースを用い「生活者」「看護教育」「看護学生」「臨地実習」でキーワード検索した。対象文献は、看護の対象者を疾患や障害を有している生活者として捉えていくとされた「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」が公開された2007年以降の文献とし、研究対象者が看護学生であり「生活者」に関する学生の実習記録やレポートもしくはインタビュー等の内容を分析している文献とした。検討対象の文献の領域は在宅看護学・地域看護学領域の文献が7件、成人・老年看護学領域が2件、精神看護学領域が2件であった。

対象となった文献を精読し、対象の文献の中で、看護学生が患者とのかかわりの中から「生活者」として理解した内容が表記されている部分を抽出し、倫理的配慮のうえ、文献の前後の文脈の意味を重視しつつ、文献レビューをした。

看護学生は、在宅療養者への訪問看護や社会福祉施設などの実習を通して療養者の住環境や個々

の生活の仕方に注目し、日々の生活の中で疾病を管理している人と捉え(柴田・大野・臺野・坂野・前田、2015)(山村・田中・稲垣・酒井、2015)、病気であってもその人らしく生きている姿(吉崎・太田、2010)や様々な背景から作られた価値観を持ち(佐藤・田高、2013)、社会的な役割を果たし(結城・鈴木・太田・小林・坂田、2009)、働いて収入を得る(川原・中村・松本・小野(伊)・小野(美)、2011)という経済的な側面を持つ「生活者」であることを学んでいた。そして療養者だけでなく家族や周りの生活環境から全体を捉えることでその対象を理解する範囲が広がることがわかった。普段の生活の中で症状や、治療を管理している様子や患者として治療を受けていても社会で果たす役割を学生は捉えており、これらは入院患者を対象とした実習だけではイメージが難しかった在宅での生活について多様な側面から理解を深めていたといえる。臨地実習が入院治療の場から、人々が社会生活を営みつつ療養生活を送っている地域へ拡大したことが看護学生の「生活者」の理解へとつながっていると考える。

3. 研究の意義

今後は、疾病を有しながら長期間生活する人々が増加し、医療においても、「治す医療」から病を抱えながら生活する患者とその家族の生活を支援していく「治し支える医療」への進展が進んでいる(日本看護協会、2015)。そのため医療費を抑制する国の政策により入院日数が短縮し(厚生労働省、2019)、病院実習は看護学生が患者と関わる期間が限られる。ましてやその間、患者は治療による症状の変化が大きく普段の「生活者」の日常にある生活行動がかなわない状況にある。看護学生は症状が非定型的である患者の状態を把握するために疾患に視点を向けやすく、病歴が複雑で個人差の大きい患者を捉える視点を学生が理解していくためには学びのサポートが必要となる(西村・前田、2018)。さらに実習で出会う対象者の多くは自分とは異なる発達段階にあることが多く、これまで経験したことのない人間の生老病死にかかわる

問題に直面し葛藤する気持ちを抱えている学生も多い(久保川ら、2011)。このように病院実習においては、短い実習期間の中で既習の実習科目で理解できた内容を比較検討しつつ、対象の生活背景や生きてきた個の歴史の中で培われたその人らしい生活スタイルや価値観を持った患者を「生活者」として理解をすることは容易ではないと考える。よって看護学生が、「生活者」の日常を捉えにくい病院実習で出会った患者を、疾病による障害やそれに伴う症状がありながらも個の歴史の中で培われた生活スタイルや価値観を持ち、社会的な役割や経済的な側面を持つ「生活者」として、どのような視点で捉えたのかを明らかにすることは、臨地実習における看護学生の「生活者」の理解への一助となると考える。

II. 研究目的

病院実習において、看護学生が受け持った患者を「生活者」としてどのように捉えたのかを明らかにする。

III. 研究方法

1. 用語の定義

生活者：疾病による障害やそれに伴う症状がありながらも個の歴史の中で培われた生活スタイルや価値観を持ち、社会的な役割や経済的な側面を持つ人

2. 研究デザイン

質的記述的研究デザインを用いた。

3. 研究対象者

病院実習における「生活者」の理解を明らかにするため、成人期・老年期の対象者に対し看護過程を展開する病院での実習を履修し、かつ在宅看護学実習履修前にある研究協力の同意の得られた看護系大学の3年生(新4年生)と4年生(在学)を研究対象者とした。筆者の所属する教育機関と異なる看護系大学において、研究対象候補者全員が集合している教室において、研究の趣旨や研究

協力は任意であること、研究への参加を拒んでも学業成績や単位取得に影響を与えない旨について直接口頭及び用紙を配布して説明し募集を行った。

4. データ収集方法

研究対象者の所属している学内のプライバシーの確保できる個室で、面接は1時間程度とし、研究対象者の許可を得てICレコーダーに録音した。データ収集方法はインタビューガイドに基づき今までの実習において、とてもよく理解できたと感じている受け持ち患者さんについてその人らしいと感じたこと、そのことに気づいた状況や内容について尋ねた。データ収集期間は2018年3月から6月であった。

5. 分析方法

インタビュー終了後研究対象者ごとに逐語録にし、研究対象者の語りの意味内容が損なわれないような長さにデータを区切り、意味のまとまりごとに番号をつけた。前後の文脈の意味を重視しつつ、病院実習で関わった受け持ち患者の生活スタイルや価値観、社会的な役割について語っている内容をコードとした。研究対象者が受け持った患者を、疾病による障害や症状がありながらもその人らしい日常生活を過ごし、社会的な側面や経済的な側面を持つ人である「生活者として理解した内容」を抽出し、基本的欲求を変容させる病理的状态にある「患者として理解した内容」と区別し分析した。

カテゴリを抽出する際には、当事者の語りの具体的な状況や理解した内容を拾い上げるために看護学生の言葉をそのまま使用し、研究対象者が語った意味内容と相違がないか、常に看護学生のインタビューデータに戻って確認した。(谷津、2015)の分析手法を参考にし、分析の全過程において質的研究者からスーパーバイズを受け、研究の真実性の確保につとめた。

表1 研究対象者の概要

看護学生	年齢	性別	患者の年齢・性別	患者の疾患名
A	21	男性	60代 男性	糖尿病
B	21	男性	40代 男性	脳血管疾患
C	21	女性	60代 男性	脊柱管狭窄症
D	21	女性	60代 男性	がん
E	21	女性	70代 女性	脊柱管狭窄症
F	21	女性	70代 女性	がん
G	21	女性	90代 男性	心不全
H	21	女性	70代 男性	がん
I	21	女性	80代 女性	うつ
J	21	女性	80代 女性	認知症
K	21	女性	80代 女性	脳血管疾患
L	21	女性	90代 女性	がん、認知症
M	21	男性	40代 女性	統合失調症

6. 倫理的配慮

研究者より学校長へ口頭及び、書面を提示して研究趣旨を説明し同意を得たのちに、研究対象候補者に口頭と書面を提示して協力者の募集を行った。研究者より研究対象者へ、インタビュー前に改めて口頭及び書面を提示して研究趣旨、研究方法、プライバシー及び個人情報の保護、匿名性の確保とデータの管理、結果の公表方法等について説明し文書による同意を得た。本研究は、国際医療福祉大学倫理審査委員会による承認(承認番号17-Io-168)を得て実施している。

Ⅲ. 結果

1. 研究対象者の概要

研究対象者は、研究協力の同意が得られた看護系大学生の3年生(新4年生)2名、4年生(在学)の11名の計13名であった。看護学生とその語りの内容となる看護学生が受け持ちをした患者の概要を表1に示す。

2. 病院実習において、看護学生が「生活者」として患者を捉えた内容

インタビュー内容から看護学生が「生活者」と

して患者を捉えた内容について、質的記述的研究デザインに従い分析をした結果、【生活習慣の嗜好と困難】【複雑な感情】【切なる願い】【家族との関係性】【人生経験から培われた個性】【担ってきた社会的な役割】の6つのカテゴリが抽出された。看護学生が病院実習において、「生活者」として患者を捉えた内容を表2に示す。なお、カテゴリは【 】, サブカテゴリは《 》で表す。

1) 【生活スタイルの嗜好と困難】

学生は、患者の入院中の生活の様子を観察し日常生活の援助を通して、入院中に整容や身支度を整える様子から《身なりに気をつける習慣》や、入院し治療中であっても《清潔を好む習慣》について捉えていた。また患者の入院前からの趣味や、入院という非日常生活の中であってもささやかな《日々の生活の楽しみ》や、患者の病室で一緒に過ごした時にかわした会話の様子から《話し好き》な人であると感じていた。

一方疾病による障害から、パソコンの操作や自動車の運転など今まで通りの生活スタイルを送る事が難しい《日々の生活を送る上での困難》も捉えていた。

2) 【複雑な感情】

看護学生は患者の生活習慣や生活スタイルだけでなく、患者と病室や病棟で一緒に時間を過ごしたことにより、患者が思わず吐露した言葉や表情から《つらい気持ち》《不安な気持ち》を感じ取っていた。あるいはがんの終末期であっても不安を訴えるのではなく《穏やかな気持ち》で毎日を過ごす様子も捉えていた。

さらに、大きな手術を受けるにあたって《治療に対する覚悟》や、疾病による障害やそれに伴う症状があり毎日を過ごす上で支障があっても自分の体調を確認し《自己管理したい気持ち》を捉えていた。

3) 【切なる願い】

がんの終末期にあっても治癒するという希望を持ちリハビリを続けたり、家に帰りたくて徘徊を繰り返したりするなどの《叶えたい願い》を捉え

ていた。そして「私はこういうのつける人じゃないの」と自ら認知症のセンサークリップを外して歩き出すなど、理想の自分を求めた《自分らしくありたい思い》を捉えていた。

4) 【家族との関係性】

看護学生は、面会に来ていた家族が患者と過ごす様子を見たり、看護学生が患者を受け持つ前の状況や、実習時間以外の患者の様子を看護師から聞いたりカルテから得られた情報から《家族に対する愛情》《良好な家族関係》を捉えていた。一方、退院カンファレンスにやっと出席し患者と関わりを持ちたくない患者の長男の様子から《希薄な家族関係》を捉えた。

5) 【人生経験から培われた個性】

看護学生は患者の病室で一緒に過ごした時にかわした会話から、若年者である学生に対して伝えたい《独自の人生観》や、学生に教えることが好きな人であるとその人が今までの生活の中で培われた《職業経験から得られた価値観》を捉えていた。そして、知り得た患者の元の職業名と患者が醸し出す佇まいから《職業的立場の名残を感じさせる独特の雰囲気》を看護学生は感じ取っていた。

6) 【担ってきた社会的な役割】

看護学生は、患者と一緒に時間を過ごし何気ない会話を交わしている時に今までの仕事で体験した話を聞き、患者の筆跡や立ち居振る舞いを見たことから《担ってきた職業における役割》や《担ってきた家庭における役割》を捉えていた。

IV. 考察

看護学生は病院実習において「生活者」として患者を【生活習慣の嗜好と困難】【複雑な感情】【切なる願い】【家族との関係性】【人生経験から培われた個性】【担ってきた社会的な役割】を持つ人として捉えていた。文献検討によって得られた「生活者」の用語の定義にそって学生が捉えた内容とともに、実習時の指導について考察していく。

1. 病院実習において看護学生が「生活者」として患者を捉えた内容について

生活とは人間の生存そのものであり、各個人の主体的な営みである(日本看護科学学会看護学術用語検討委員会、2011)。「生活者」とは看護学においては「患者」に對置するものとして用いられ、静的な状態を表すのではなく、悩みながらも自ら問題を見つけたり、長い時間の中で培われた自分の価値観や生活信条に基づいて行動しようとしたりする姿を指しており、生活の全体性を把握する主体を示す用語として用いられている(黒江ら、2006)。そして看護の対象を「生活者」として捉えるとは、対象者には日々の生活とその人が大切にしている価値観やその人らしい生き方・思いがあり、病気により療養が必要となった時に生じる辛さや違和感、その人にとっての生活の意味を見出し理解することである(下村ら、2003)。看護学生が患者の「生活者」の部分を理解するためには、患者にとって生活がどのような意味を持ち、患者がどれだけそれを大切にしているかについて知ることが大切であると考えられる。

看護学生は臨地実習において、患者の近くで過ごす機会を持ち患者とコミュニケーションを取りながら関係性を作り、入院中であっても今までの生活スタイルを維持できるように《入浴を好む清潔習慣》を援助し環境を整える日常生活の援助を行っていた。日常生活の援助はニードの充足だけでなく、患者が入院生活を送る上で生活リズムを整えるきっかけとなり、その人らしい生活を送ることを支える技術である。看護の対象は生活上のニーズに何らかの支障をきたしており、対象の生活をどのように理解するかは看護の質に影響を与える(須藤・平川、2017)。日常生活の支援を通し、対象者を生活の全体から捉えること、直接的なかわりの中から患者が何を求めているかを見極めることが看護学生の対象者の個別性の理解につながる(奥田・深田・青戸・栗納、2016)。看護学生が「生活者」として患者を捉えることができた理由は、病院実習において患者の日常生活の援助を行う機会を多く得られていることであると考えられる。

さらに看護学生は、一緒に時間を共有し会話を交わすことにより患者の基本的欲求を変容させる病理的状态のニードだけでなく基本的看護の構成要素(ヘンダーソン、1960)にも着目し、患者のこれまでの生活背景やその人が大切にしている思い、仕事で得られた達成感について知り得たことから「生活者」として患者を捉えていた。看護学生は「人生を楽しんできたことを若い人に伝えたい」という患者の言葉から強さとかっこよさがある人とその人の《独特の人生観》に気づいたり、人の上に立つ仕事をしてきたから学生に教えることが好きと《職業経験からの価値観》に気づいたと語っている。会話やその人の佇まいから《職業的立場の名残を感じさせる独特の雰囲気》として【人生経験から培われた個性】を理解していた。このように、看護学生が「生活者」として患者を捉えるためには、患者のこれまでの生活背景や価値観、その人の大切にしている思いや言動の意味を受け入れて患者の言動の背景を知ることが重要である(杉野・丹羽 2011)。

看護者から見ると問題行動としてしまいがちな患者の行動であっても、その背景にはその人なりの思いが存在している。他者の介助がないと何も出来ないという患者の《つらい気持ち》や心配で看護師を呼んでいるという《不安な気持ち》を捉え、看護学生は患者の不穏な行動に対してではなく患者の心情に思いを寄せて【複雑な感情】を持つ人と捉えていた。さらに「自分は出来る、もう元気になった」という思いが強く、自分の体力を過信して安静度以上に病棟を歩きリハビリテーションを頑張りすぎてしまっている患者の様子や、「私はこういうの(認知症対応のセンサークリップ)つける人じゃないの」と自らクリップを外して歩き出す患者の言葉から看護学生はその人のプライドを感じ取り《自分らしくありたい思い》を捉えていた。さらに徘徊を繰り返しているのは家に帰りたいからなのだと患者の《叶えたい願い》から【切なる願い】を捉えていた。実習が進むにつれて患者の身体面の理解に加えて心理面などに注目できる看護学生が多くなる(若林・安田・寺境・

吉井・田中、2007)が、本研究においても看護学生は日常生活の援助を行いながら心理面にも着目し、疾病による障害やそれに伴う症状がありながらも個の歴史の中で培われた生活スタイルや価値観を持つ「生活者」として患者を捉えていたことがわかった。

患者にとって家族は共に支え合う存在であり、影響し合う存在である。学生は患者の近くで過ごす機会があったからこそ《家族に対する愛情》を感じ《良好な家族関係》を理解していた。実習時間内に家族と面会することは出来なかったが、カルテや看護師からの情報や、家族の面会の回数が少なく退院カンファレンスの為にやっと出席したという息子との【家族との関係性】からも「生活者」の側面を捉えることが出来ていた。

看護学生にとって、「生活者」として患者を捉えやすい側面と、そうでない側面があると考えられる。看護学生は「生活者」の【担ってきた社会的役割】について、カルテに記載されている職歴だけでなくどのように仕事をしてきたのかなど対象者の《担ってきた職業役割》や《担ってきた家庭での役割》を捉えていた。一方本研究において看護学生から暮らしを立てるために働いて収入を得るなどの「生活者」の経済的な側面を理解したデータは得ることが出来なかった。在院日数が短縮し急性期や治療中の患者を受け持ったのであればその看護ケアを行うことだけで精一杯で、看護学生が退院後の暮らしを見据えた看護の視点を持つことは難しい(松崎ら、2015)。看護学生が経済的な側面に視点を当てる機会が少なかったのは、学生が受け持った患者の多くは老年期にあり、入院による休職やそれに伴う収入の減少などの影響は受けておらず経済的な側面を持つ生活者として捉えることは難しかったのではないかと考える。さらに病院実習においては在宅看護学実習の訪問看護などで体験する学び(佐藤・田高、2013)とは異なり、生活体験の少ない学生が限られたスペースの療養空間に置かれている患者の私物だけで患者の自宅での生活や経済的な状況を推測することは難しい。しかし患者・家族は退院にあたり経済

的な不安や退院後の生活に対して漠然とした不安を感じており、看護学生は入院中から退院後の生活も視野に入れ患者が安心して日常生活に戻るような支援について理解する必要がある(西崎ら、2015) と考える。

2. 看護教育への示唆

病院実習中に患者のそばの椅子に座り患者と積極的に会話を交わすこともなく、ただ所在げに佇んでいるような看護学生の様子を見かけることがよくある。しかし看護学生は実習時間中にただ患者のベッドサイドで過ごしていたのではなく、一緒に時間を過ごしている時に患者が思わず吐露した【複雑な感情】や、自分らしくありたいという【切なる願い】から「生活者」としての側面を捉えていたということが本研究で明らかとなった。看護学生が病室で患者と一緒に時間を共有することは、患者の《身なりに気をつける習慣》や、入院という非日常生活の中であってもささやかな《日々の生活の楽しみ》などを垣間見て【生活スタイルの嗜好と困難】を知ることができる機会であると考え、学生の行動を見守ることが指導として必要と考える。

そして看護学生は臨地実習において看護の対象者に語ってもらう機会に出会い、自分と違う患者の生活を知ることによって生活者の理解が促進される(下村ら、2003)。しかし成人期や老年期にある患者は、発達課題やそれまで暮らしてきた生活習慣も多様である。看護学生の多くは多様な年齢の他者と関わるという社会経験が少ない(舟島、2013)ため、千差万別の人間の生活の様相や、行動の背景にあるその人の価値観の一つひとつの意味を深く掘り下げて理解していく事は短い実習期間では困難を極めるといっても過言ではない。そのため指導に当たる教員や指導者は看護学生の行動を見守り、看護学生が患者のそばで視覚的・感覚的に漠然と捉えた「生活者」に関する情報の何に気づき、どのように感じ取っているのかを言語化させ、内省活動を支援する事(乗越、2019)が必要である。

安酸(2015)は経験型実習教育における学生との

対話について、学生が自らの経験(直接的経験)を振り返り表出することが必要であり、指導にあたる教師は学生の直接的経験を把握し、明確化するために学生の行動や話をよく見てよく聴く事が求められる。さらに、自己表出の少ない学生に対しては指導に当たる教員が推測力を働かせ学生の直接的な経験を明確にしていくための発問を行い、学生の思いや考えを引き出すことが重要であると述べている。看護学生が知り得た「生活者」としての側面を、患者との直接的な経験をリフレクションさせながら(東、2009)思考の展開を進めていくことが「生活者」として看護の対象の理解を支援する教員の関わりであると考えられる。

教員は焦らず看護学生の行動を見守り、看護学生が漠然と捉えている患者の情報を引き出しその人との関わりから知り得た【複雑な感情】【切なる願い】を言語化させていく事が「生活者」としての理解を促すと示唆された。

V. 結論

1. 看護学生は病院実習において「生活者」として患者を【生活習慣の嗜好と困難】【複雑な感情】【切なる願い】【家族との関係性】【人生経験から培われた個性】【担ってきた社会的な役割】を持つ人と捉えていた。
2. 入院中から患者の退院後の生活も視野に入れて関わり、「生活者」として経済的な側面から捉える必要性が示唆された。
3. 看護学生がその人との関わりから知り得た【複雑な感情】【切なる願い】を教員が引き出し、言語化させていく事が「生活者」としての理解を促すと示唆された。

VI. 本研究の限界

研究対象者の看護学生は3年次から4年次で臨地実習の経験を重ねており在宅看護学実習履修前の病院実習における「生活者」の理解について導き出すことができた。しかし研究者のインタビュースキルの不足により看護学生の「生活者」の理解について明らかに出来たとはいえ今後研究

を積み重ねていく必要があると考えられる。

なお、本研究における利益相反は存在しない。

文献

- 東めぐみ(2009). 看護リフレクション入門 経験から新たな看護を創造する. 神奈川: ライフサポート社.
- 舟島なをみ(2013). 看護学教育における授業展開一質の高い講義・演習・実習の実現に向けて一. 東京: 医学書院.
- 川原瑞代, 中村千穂子, 松本憲子, 小野伊代, 小野美奈子(2011). 地域看護学実習における地域活動支援センターでの学生の学び-実習記録の分析より-. 日本看護学会論文集: 精神看護, 41, 159-163.
- 公益社団法人日本看護協会(2015). 看護の将来ビジョン
<https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/pdf/vision-4C.pdf>
- 厚生労働省(2011). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 2011. 2. 28
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>
- 厚生労働省(2017). 患者調査(傷病分類編)
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/10syoubu/>
- 久保川真由美, 栗原加代, 山岸千恵, 小澤尚子, 原島利恵, 豊田真弓, 宇留野由紀子(2011). 終末期看護実習での学生のトータルペインの理解のプロセス~9名の学生のインタビューから~. 茨城キリスト教大学看護学部紀要, 2(1), 11-18.
- 黒江ゆり子, 藤澤まこと, 三宅薫, 普照早苗, 田内香織(2006). 看護学における「生活者」という視点についての省察. 看護研究, 39(5), 337-343.
- 松崎奈々子, 近藤浩子, 堀越政孝, 恩幣宏美, 上山真美, 桐生育恵, 牛久保美津子(2015). 地域での暮らしを見据えた看護に関する看護系大学4年生の興味・関心. 群馬保健学紀要, 36, 31-37.
- 日本看護科学学会看護学学術用語検討委員会第9, 10期委員会(2011). 看護学を構成する重要な用語集. 33.
- 西村直子, 前田恵利(2018). 老年看護学実習に毎日繰り返し行うフィジカルアセスメントを導入した学生の学び. 川崎医療福祉学会誌, 27(2), 535-544.
- 西崎未和, 尾崎章子, 其田貴美枝, 畑中晃子, 御任充和子, 山本由香, 荒井有希子(2015). 看護基礎教育における退院支援実習の学習成果. 日本在宅看護学会誌, 3(2), 74-83.
- 乗越千枝(2019). 臨地実習における看護学生の気づきに関する文献検討. 梅花女子大学看護学部紀要, 10, 40-49.
- 小塩泰代, 白石知子, 大橋裕子, 鈴木寛之, 宮武真生子, 大島圭恵... 玉利玲子(2012). 在宅看護論実習の振り返り-実習内容と学生の学びの状況の考察-. 中部大学生命健康科学研究会紀要, 8, 49-55.
- 奥田玲子, 深田美香, 青戸春香, 栗納由記子(2016). 生活援助論演習での経験型学習をととした学生の学びの分析. 鳥取大学教育研究論集, 6, 27-36.
- 大木秀一(2016). 看護研究・看護実践の質を高める文献レビューのきほん. 東京: 医歯薬出版株式会社.
- 佐藤美樹, 田高悦子(2013). 在宅看護における生活者としての対象理解にかかわる学生の学びの視点. 日本看護学教育学会誌, 22(3), 47-55.
- 柴田和恵, 大野和美, 臺野美奈子, 坂野恵子, 前田明子(2015). 成人看護学臨地実習における外来看護体験実習での学び. 天使大学紀要, 15(2), 41-53.
- 下村裕子, 河口てる子, 林優子, 土方ふじ子, 大池美也子, 患者教育研究会(2003). 看護が捉える「生活者」の視点 対象理解と行動変容の「かぎ」. 看護研究, 36, 199-211.
- 須藤みつ子, 平川美和子(2017). 看護学生が日常

- 生活援助の視点を養うプロセスー日常生活経験と看護の学びにおける認識変容に着目してー. 弘前医療福祉大学紀要, 8(1). 59-66.
- 杉野朋子, 丹羽さよ子(2011). 「老年看護学実習」における学びの分析: 学生の実習レポートの分析より. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 21. 13-19.
- ヴァージニア・ヘンダーソン(1960/1961). 湯楨ます. 小玉香津子(訳). 看護の基本となるもの. 東京: 日本看護協会出版会.
- 若林理恵子, 安田智美, 寺境夕紀子, 吉井忍, 田中三千雄(2007). 実習記録からみた成人看護実習における学生の学び. 富山大学看護学会誌, 7(1). 43-54.
- 山村江美子, 田中悠美, 稲垣優子, 酒井昌子(2015). 在宅看護論実習における学び - 対象の理解と在宅看護実践の特性に焦点をあてて -. 聖隷クリストファー大学紀要, 23, 41-51.
- 安酸史子(2015). 経験型実習教育 看護職を育む理論と実践. 東京: 医学書院.
- 谷津裕子(2015). Start Up 質的看護研究 [第2版]. 東京: 学研メディカル秀潤社.
- 吉崎文子, 太田節子(2010). 高齢者看護実習 I における看護学生の学びの特徴: 生活者である施設利用者との関わりを通して. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 10(1), 42-45.
- 結城佳代, 鈴木敦子, 太田知子, 小林美子, 坂田三允(2009). 精神障害者社会復帰施設における精神看護学実習の学びの分析 - 地域看護学実習展開の可能性の検討 -. 名寄市立大学紀要, 3, 15-22.

Abstract

We examined how nursing students perceived the patients they attended in hospital practical training as “ordinary persons” who had lifestyles and senses of value cultivated as part of their personal histories, social roles, and economical aspects, despite the disturbance caused by their diseases and associated symptoms. An interview survey was conducted with university nursing students who had undertaken practical training at a hospital to develop skills in nursing adult and geriatric subjects and who had given consent to cooperate in the research before undertaking practical training in home healthcare nursing. A qualitative and descriptive analysis of the data obtained revealed that nursing students viewed patients as “ordinary persons” with “lifestyle preferences and difficulties,” “complex emotions,” “serious wishes,” “relationships with family,” “individuality cultivated through life experiences,” and “social roles that they have played.” The results suggested that, to promote nursing students’ understanding of patients as “ordinary persons,” teaching staff should draw out patient information that is vaguely perceived by the students and let the students verbalize the “complex emotions” and “serious wishes” that they learn from their patient interactions.

表2 看護学生が病院実習において、「生活者」として患者を捉えた内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
生活習慣の嗜好と困難	身なりに気を遣う習慣	鏡の前で髪を整え身なりに気を配り、マニキュアを塗るなど人目を気にする人だと気づいた 髪型を気にしている人だと気づいた 服装はあまりこだわりのないが髪型を気にする人だと気づいた 今日に着る洋服をちゃんと選んでいる人だと気づいた 自分でパジャマを選んでいる人だと気づいた
	清潔を好む習慣	入浴や足浴などのリラックスすることが好きな方人だと気づいた 学生に足浴をしてもらうのが好きな人と気づいた シャワー浴ができるのがすごくうれしそうだと気づいた 湯船につかるのが好きな人だと気づいた
	日々の生活の楽しみ	本を読むのが好きな人だと気づいた 日記帳に書くことを続けていて日々の出来事を書き留めておくのが好きな人だと気づいた 妹と昔の話をしながら手遊びをするのが好きな人だと気づいた 入院する前はジムに通い、はつらつと生活していた人だと気づいた 趣味の釣りが大好きな人だと気づいた
	話し好き	歌を歌うことが好きで、他の患者さんと話をするのが好きな人であると気づいた 難聴があるが、話し好きでコミュニケーション能力が高い人だと気づいた 看護師の質問に答えずに、ずっとしゃべり続ける人だと気づいた
複雑な感情	日々の生活を送る上での困難	パソコンや携帯電話の操作、自動車の運転などが難しく、社会生活を営むことが難しい人と気づいた 難聴や片麻痺、半側空間無視により、入浴の時や排泄の時に滑りやすい人だと気づいた
	つらい気持ち	他者の介助がないと何もできない患者のつらい気持ちを抱いている人と気づいた 子どもの名前を覚えられなかったダメな先生だったと自分を責めている人だと気づいた 一人暮らしをしていたが、定年後に母親と同居したことがストレスだった人と気づいた しゃべることや食べることができなくなり、鏡も見られない苦しい気持ちを持つ人と気づいた 万引犯と間違われたことがショックだった人と気づいた
	不安な気持ち	面倒を見ていた姪に「もう世話したくない」と言われてから夜叫んだりオムツいじりをしたり寂しくて不穏になった人だと気づいた 車いすで移動しないと自分一人でトイレに行けない為、心配になって大声で看護師を呼んでしまう人だと気づいた 自宅で創部の管理をすることに不安がある人と気づいた 家族の方が手術に対して不安がある人だと気づいた
	穏やかな気持ち	同室者と自然に会話をしたり、穏やかに日々を過ごしている人だと気づいた
切なる願い	治療に対する覚悟	治療のために大きな手術を受ける覚悟をした人だと気づいた
	自己管理したい気持ち	出来るだけ自分のことは自分でやりたいという気持ちを持つ人だと気づいた 自分のバイタルサインの値やリハビリの状態をノートに書いて健康管理している人だと気づいた 人の世話になるのが申し訳ないという気持ちを持っている人だと気づいた
	叶えたい願い	がんの終末期でも諦めずに希望を持ち続けている人だと気づいた 家に帰りたくて徘徊を繰り返す人だと気づいた 家に帰りたくてドアの前で落ち着かない様子で過ごしている人だと気づいた ベッドから富士山を眺めている様子から富士登山が夢だった人だと気づいた
	自分らしくありたい思い	「私はこういうの、つける人じゃないの」と自ら認知症対応のセンサークリップを外す行為からプライドがある人と気づいた 手術後のリハビリテーションでもできる、大丈夫という自信がある人だと気づいた 自分の仕事や外国での体験から人への接し方などについて人生観を持つ人だと気づいた 塗り絵を見本のように塗りたいという完璧主義な人と気づいた 完璧な理想の自分を目指している人だと気づいた

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
家族との関係性	家族に対する愛情	娘が来ると別人になり、娘を溺愛している人だと気づいた 娘に心配をかけたくないのでリハビリを頑張る人だと気づいた 子どもが好きで家族を大事にする人だと気づいた 仕事も家族も大切にしている人と気づいた
	良好な家族関係	妹さんが頻回に面会に来て着替えを持ってきてくれる人だと気づいた 土日に家族が面会にきてくれている人だと知った
	希薄な家族関係	(退院カンファレンスにやっと出席した)息子との関係がぎくしゃくしている人と気づいた 両親も他界し兄弟と疎遠になっている人だと気づいた 看護師の話から2~3カ月に1回ぐらいしか家族が面会に来られない人だと知った 独身で在宅介護を受けることが難しい人だと気づいた
人生経験から培われた個性	独自の人生観	人生を楽しんできたことを若い人に伝えたいという言葉から、強さとかっこよさがある人と気づいた 周囲に弱みを見せない人だと気づいた 「学生に勉強させてほしい」と下手に出ると、話を聴いてくれる人だと気づいた 学生に気を遣い、本当の気持ちを訴えない人だと気づいた
	職業経験から得られた価値観	テレビ局のディレクターという人の上に立つ仕事をしていたので、学生に教えることが好きな人だと気づいた 最終日に掃除のポイントを教えてくれて、長年清掃の仕事をしてたからこそ学生である私に伝えておきたいことがあると気づいた
	職業的立場を感じる独特の雰囲気	身だしなみや話し方が印象的で、元大使館員という名残がある人だと気づいた 身だしなみに気をつけて清潔感のある人だと気づいた 「(退院後の)身の回りのことは心配ない」と、お手伝いさんがいる生活環境でずっとすごしている人だと気づいた 「今日は何を教えたらいのかしら?」と、看護学生ではなくて教育実習生と思って会話をしている人だと気づいた 学生が登下校時に事故に合わないか心配してくれる人だと気づいた 元小学校の先生らしい綺麗な字を書く人だと気づいた
担ってきた社会的な役割	担ってきた職業における役割	物事をはっきりと話す様子からキャリアウーマンとして長く会社に勤めてばりばりに働いていた人だと気づいた 入院前は食事や睡眠時間も不規則で、今までテレビ局のディレクターとして忙しく働いてきた人だと気づいた
		時間に正確で日記を細かく記している様子から国鉄の運転手としての仕事を長く勤めていた人と分かった 髪型や立ち居振る舞い、話し方などのその人の言動から外国にある日本大使館で一番偉い立場で働いていた人だとわかった 何種類もの内服薬を自分で管理し、副作用について詳しく学生に説明してくれたことから元薬剤師だとわかった 環境整備の時に室内の掃除のポイントを教えてくれて清掃員として細々としたところまで気づいて働いていた人とわかった
		担ってきた家庭における役割